

達の気持のいい仲間を維持する為に会費をみんなで出して、お世話をして下さる人には、その中からちゃんと世話料や通信費位は出して、よろしくと言わなければいけないのです。どうやって人の集団ができるかと言えば、必ず世話役が要るのです。人を集めることについて気軽に辞を低くして多少不愉快なことがあるでしょうけれども、小言も聞きながら連絡をしてあげるとか、それは皆さんが同窓会などを考えてみれば理解できるでしょう。リーダーとか組長さんが同窓会の幹事とは限りません。同窓会はそういう人が号令をかけてもなかなか集まらない。しかし、お世話を上手にしてくれる人がいたならば、その人のお世話によって、人は気持よく集まります。このお世話をする人をみんなで大事にしていくことが集まりを盛りたて団体をつくっていく所以なのです。

昭和40年頃から急速に団地化が進みました。団地の生活というのは、良いような悪いようなところがあると思うのです。団地に入った人達が、どういふ心理状態になるのか。体育局の前に社会教育局というところで経験したのですが、社会教育研修所に集まってこられた社会教育主事さん方に研修の課題として、団地の住民の生活行動を調査してもらいました。団地の住人がどういふ一日の生活行動になっているのかを調べてもらったのです。柏市に出来た豊四季という団地に入って調べてくださいました。そこでわかったことはああいふ団地に入って初めは隣は何をする人ぞというような状態ですが、けれどもそれだけでは落付かなくて、どこかで人の輪ができるのです。しかし、その人の集れる場がない。初期の団地というのは、2DKとか、3LDKとかいふような部屋だけしかない。悪く言えば、檻に入れられた鶏と同じ様な生活環境になっているのです。こういう生活環境をつくっていくのは日本の将来にとって大問題です。本来ならば一番バイタリティーのある、活力のあ

る日本の若いカップルです。それが子供を産んで、動きがとれない。車時代にもなってきましたから車で外に出ていく。こういう国民生活というものを広げていくということでは、これは大変なことになります。

そういう団地で住民の人達が要求するものは何か、もう少し集まる場所が欲しい。もう少し子供達が遊べる運動施設が欲しい。大人でもそうなんですけれどもグループ活動をするということが、まず始まりだということです。最近の団地には、このような人の集まれる場所も整ってきたようですが、本当に生活に即した必要なグループというものが、いい世話人を中心にしてつくられて行かなければ、団地が広がっても向う3軒両隣はなくなってしまいます。そして、何かあると、電話で交番に文句を言う世の中になっているわけです。

こういう人間の生活環境をこのままにしておいたら本当に、大変なことになります。今度の臨時教育審議会で将来の教育をどうするか、今、いろんなことを議論していますけれども、私は先程、吉田課長が言われた生涯学習というのが、一番大事だと考えます。何故かというと、今、丁度戦後のベビーブームの世代が、40歳前後のところですよ。労働可能人口の一番主流になっています。失業もだんだん増えつつありますが、日本の社会というのは、そういう仕事をしている年代の人達が総人口に対して、70%を占めている。それに対してまだ若い子供の世代が20%、65歳以上が10%です。つまり若い層と高齢者層をあわせて計3割、あとの7割が仕事をしている年齢層になります。ところが、21世紀になると、或は20年位経ったらどういうことになるか。皆さん方もその年代に入るわけですけども、65歳以上の人は二割或は二割を超えてしまう。若い方は減っていきます。そうするとその時期には、今の出生率の少ない層が仕事をするようになり、今仕事をしている人口の多い

層が老人層になる。こういうことになりますと従属人口（労働しない人口）が、今よりも5割以上増えてしまうのです。そして働かなければならない層は、今よりも相対的に小さくなります。そこでどういうことが起こるか。なおかつ、今日以上の生活を続けるということになると、どうすればよいか。ロボットを入れてくるから、人間よりも遙かに効率のいい、24時間労働をしてくれる。ロボットがやってくれるから生産ははかどる。それは結構ですけども、その世話をしている労働人口というのは無茶苦茶に忙しくなる。成長期には学校へ行って、大学に行っている間も遊んでいて、仕事に就くようになると、無茶苦茶に仕事をして、60歳で停年となり、その後は毎日が日曜日というようなことになる。そういう状態のままで、21世紀になった時には、今の皆さん方の子供さん方というのは無茶苦茶忙しくて、皆さん方は何もすることがなくなってしまいます。そうすると日本の社会というのは、重たい社会になり大変不健康な社会になります。

そこで臨教審はどういっているか。国民生活審議会も同じようなことを言っていますけれど、一人前になるまでは勉強し、体力をつくるようにスポーツをやる。それは一番大事なことで当然です。今度は、労働に入る時期ですが、これはある程度遅くなります。今まで、高校卒で半分程就労していたのが、大学を卒業してから就労するようになる。その時に無茶苦茶に忙しいという時代が来るのです。働いている人が世の中のテンポに追いつかないという現象は今、いろいろな職場で起こっています。色んなところでそうなのですが、鉄をつくっている企業などが、鉄ではなく野菜などをつくることに一生懸命転換しようとしていたりしているのです。造船所のドックの跡に家庭菜園用の苗床がある。NHKのテレビを見ていると、本当にびっくりします。造船所の職工さんが職種転換をしているのです。一生懸命家庭でナスがつかれるように苗木を

つくってある程度大きくなったところでそれを売り歩いている。20年経って同じ仕事を続けていける企業というものは、そうは存在しない。戦後を振り返って見ても、昭和20年代に日本を支えた産業は大方沈没してしまいました。昭和30年初めまでは学校を卒業して半分程の人は農業に入った。卒業生の5割が農業であった。それが30年から昭和40年の間に一気に5%に減ってしまった。今日は大分前から三ちゃん農業ということを言われて年寄が農村に残り、これがだんだんとサヨナラしていく時期になります。そうになると今1割ある農業人口は、もう少し減るでしょう。世界一高いお米をアメリカのカルフォルニア米の5倍もするようなお米を食べている。それは生産効率が悪いからです。もう少し、農業人口が減ればいやでも単価面積が大きくなってコストダウンします。そういう方向に行かなければならない。それでは第2次産業はどうなるのだろう。今、就業人口の33%が第2次産業ですが、これも10%前後に減って行くという。アメリカもそういう方向にいつている。日本もそういう方向に行くであろう。機械をつくるのは、ロボットの方がいいからです。間違いがなく24時間仕事をしてくれます。日本の精密な機械が全部ものをつくってくれる。工場へ行ってみると人間は、機械の守りをしているだけで大きなものは全部ロボットがつくり、何10秒に一台ずつ製品が出来上るのです。自動車工場がロボット化して行って、しかも日本では労賃が高く、コストがアップしてしょうがないから、韓国へ行って合併でやろう。むしろ、アメリカやイギリスの方が労賃が安いから工場を向こうへ持って行くということで、出ていってしまいます。

これで日本の産業はいいのかという問題がありますけれども、それは今日の本論ではないから置いておくとして、国民生活がどういふふう動いていくかということを考えなければならない。そうすると、もう一つ大事な問題

がある。それは年寄が多くなり、この年寄がどういうふうに生きるかということ。文部省のスポーツを奨励するセクションは、年寄のスポーツのことについて手の入れ方が少な過ぎる。あれは、厚生省の福祉だと、向こうのこのように感じているようだが、そうではない。国民の健康と老人が長煩いしないようにするにはどうするかということは大事な保健、健康教育の課題なんです。これをスポーツと絡めて、最後まで、ああ、あの人は元気に昨日までゲートボールをしていたのになー、お迎えがきたからお目出たいねと言えるようにしなければならない。老人が2年も3年も寝たきりで、どうにもならなくなるとか、ボケになってしまって、どこへ行くのかわからなくなるから鎖につないでおかなければならんとか言うようなことをやっていたのでは、みんなくたびれてしまう。仕事をしなければならない人が一生懸命になって人口の2割を占める年寄をウォッチしなければならないというのでは困ったことになります。年寄は年寄で生きる自分の生きがいがあって、楽しく健康でお迎えがくるまで健康でいる、ということ。厚生省とも一緒になって考えなければならないのです。これからの体育行政スポーツの行政ということは、そういうことを考えなければなりません。仕事をしている間にどのようにしてスポーツをやり、みんなで集まって団体活動をやって健康を維持するかという智慧を出さなければならないのです。勤務時間の中でどういうふうにそれをつくるか、地域の工場ともタイアップして時間の中で何とか体操というのを時々やったりしております。会社などは朝とかその他の時間に色々と工夫してやっています。これは組織があるところでは、そうやっているのですけれども今度は、その組織を地域社会の中でどうやってつくっていくか、ということ。これを考えなければなりません。それがスポーツ関係者の大事な課題なのです。国民の体力とか、国民の健康とか、国民のスポーツということ。をい

うのであれば日常の市民生活の中でどういうことがお世話できるか、組織ができるか、そして世話をしてくれる人を中心にして、そういう活動が広がるということ、学校を卒業してもずっと地域社会の中でつくっていかなければならない。そして停年を迎えた人に対しては、ますますそのことを考えて健康の相談に預かってやらなければなりません。それが生涯学習の課題なのであります。

結局、教育というのは自分で勉強する他ないのです。自分の健康は自分で維持する他ないのです。自分で自分の健康を維持するということを習慣づけさせるために、どういう環境をつくってどういうふうにブラッシュアップしていくかです。実はスポーツ安全協会のこの保険には、当時からそのことを100%考えたと言うと少し言い過ぎかもしれませんが、大体日本の社会の姿というものは、当時から見えていた。ですから、中央教育審議会でも、そういうことを言っているし、昭和46年の社会教育審議会の答申「急激な社会構造の変化に対応する社会教育のあり方について」は昭和42年から議論してきた。その過程の中で、すでにこういう問題を予測して、何とかして生活の中におけるスポーツ団体を伸ばしていこう。それは、学校の間であってよろしい。学校の外であってよろしい。みんなを通じて伸ばしていくようにしよう。それが将来の教育行政における地域の健康教育の最大の課題であったのです。要はそのきっかけにしてもらうのがこの保険だったのです。「保険があるから指導者の人は安心して世話をして下さい。指導もして下さい。もちろん健康診断を必要とする時には健康診断をしてもらいながら上手に指導してもらわなければいけないけれども万が一ということがあった場合に、この保険でお世話を致します。」どうも残念ながら、その後の動きを見ておきますと、保険の加入のところだけが残ってしまったの

です。当初考えていた国民の健康をどうするか、国民のスポーツ活動をどのように習慣づけるかということが抜けてしまったのです。かろうじてスポーツ安全協会は皆さんの御協力を得一生懸命調査をしてどういふふうなスポーツ活動が行われて、どれだけの事故が起こっているかというデータだけは、お陰様で集まってきているようですけれども、本当はそれから先へ行ってほしい、これは体育行政のほんの下積の土台なのであり、このデータのもとに県の体育行政を大いに伸ばすということを是非やってほしいのです。ですから補助金をもらいにくるところではなくて、自分でスポーツをやっている人を大事にすることをどんどんやって下さい。私どもがお世話をしてあげますというのが、このスポーツ安全協会の設立の主旨であり、保険制度で補償する主旨です。だから保険料だけではなくて会費を集めてほしいのです。会費でもっともっと活発にやってもらいたいし、集まったら後はお茶でも一杯位飲みましようよというふうに指導してほしい。我々の市民生活というものをそういう観点から変えていく努力をする。そうしないと21世紀の日本の国民生活というものは、忙しい人がめっほう忙しくなって体を壊してしまう。最近でも50代で死んだ経営者のことが新聞に載っています。こういうことがもっとひどくなるでしょう。そして暇な人がますます暇になってどうしてよいかわからない。ベッドで長煩いをするようなことになる。ベッドの長煩いをやめようとするれば、やはりできるだけ自分で自分の健康を維持していく以外にないと思うのです。ですから皆さんの活動には、実は、そうした将来に対して何とかしなければならぬという使命がかかっているのだということをお願いしたい。保険会社の手伝いをしていてはいい。保険会社に注文を出さなければいけないのです。この日本の将来の国民生活のために、この保険をいろんなところでお世話くださる時に保険会社のことではなく将来の

ことを考えて社会保障としてやってもらいたい。保険会社は、これで儲けようなんていうことを考えてはいけないのです。そういう意味でひとつ皆さん方にも力添えを頂きたい。私もこれをつくった時の経緯から顧問ということになっているものですから、お願いに出てきた次第でございます。よろしく
お願い致します。

講 師 紹 介

本会が設立された当時の文部省体育局長で、名実共に本会の生みの親とも申すべき方です。文部事務次官ご在任の時、また現在は本会の顧問として常に本会の発展についてご指導を賜っております。